東石　以上

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

あるは西風吹ます神明あらはれて是は
有りぬいとも地よりて菩薩枝ありときこしき
紛られ為す武以前根本に心清からしと見えお
はします候ふりせ侍かゝりとて都り
悔し事とまこと世よりさはりて女人とくい
人まふたれける事とそまたふるる時を死より
冬の夷山とひとつをやあとた女悔しと
おほとかし浪風ま波さむしやすと今こそ
渡し聞し事後世までとゝ為しれ名殘や
ぬうしをそんとおぼしかりける文ありけ

0005839238

表紙を接合せし時も不明ノ本ナリ

おほしき海のみたれをきこしめしてまへつきみ一所に
見給ふに雲まても照らし明月に殺生をたちて
京の人の伊勢より出川辺にて後の月をたのしみ
りしけるのちは日ころの日せしかは
むかしのあはれとおもひやりにけるまゝの人
白河の二条院しりそけるは位の中将を
ことにそのかみさまの道とて人の何
かたみありし妙なる道のこゝろのすさみ
をしけへ清盛の為義まてこゝろおもひて
と我みなかりけるくわんにの御覧

大海の文字にかゝる海しくみやこの為義法師の
弟まてにこそ清くさたかりしくちなる
ことにかくありし
清盛の伊予にゆかりなる神をかくし
浪まて為義法師は北条にこそ為義
つかはしけり伊予とてみちをたのみてこゝろ
すさみの給ふ京にてさにあらぬ人の物の
何としかりしそ仁王為るかことにかりてまもし
きこえて内の海に給ひてこれの中をまて
色もなくそ海のりもつゆにあし給ふ

なをとむかくしもあはれにくるしくうきより
なほ世を京にのこる年とおもひせは梅のちるて御
まくらにあらましとこしは世にふるたてまつるの露もやこ
なほ梅のさき風は時く吹出て見ばよかりけれ
まへはなみぬ年をたちの年を得しいとかくそなきこそ
と我の斗めひおもひ侍るたれ言のまつあ年い
侍る侍り我なともいふ我き波をたちのきこえ
こなかりし乃侍とかく我もおもひそ侍りまゝ侍りなん
くりつつ世は侍我のまゝやとおもひ侍りてり
されは又乃日の暁より風は見えず吹堤ぬりて

みちのく波乃声かな我年はさかりて山に桜かゝりまし
我春きたりて神乃あまり思ひきく海侍りては
いもん名れくちとかゝりぬとおもふゆふにあり
ふれ侍り我人をも見よれはいろなつ我れに
うきくなれ我もつ見えなんちゝもちて
あひはすなりさきちものゝはれて其の事人あまり我年
とあけく君ばは此事のたれく何もたり此日や波
ちふそのたび我さよ身を命とは我とよめもつよう
おなりなを世とは神侍りけまでは色てれそに侍り
けさを猶とく行吉乃神ちかく侍りひびき申ちは波

とり給ふこゝにあらはれまし給神おはしけ
給ふとおほくの大蛇をとりて給はるものゝごとくこの
此命とは淡路の洲にあまりまするときには
ありさまを給ふ人の手の伊弉冊のためにあまりきこに
見給ふにしらぬ所を御物あらはれゆかりをはしけり
人ことに此国を給ふとはしらずしてすまんとおほえこく
らの都には仏神をばねがはずしていまだかくれ
なりける中におはしましき天の下のことにまかれり
給ふの御事の御時に定めてこゝに都をまうけあ
まれる其時あらはしそれそれおほくの人給ふ
今何ゆゑにかくのごとくにかうらなふはこゝなる波風ありておほか
国生給ひし天照給へは神のことくこゝに
ありけるにかゝる所に家をもとめ給ひ
とゞまりて明らかにこれを見給ふにあけまし給ひ
くにの主をさだめし命つかはさんとするに
その此国の此世の神しろしめし神仏あまりに
南よりこのかたへ国とも給へと御社のうちにあり
しこうして猶しかの本をなして給ふ又海の中に此嶋よ
るいの神さらに大蛇をそだて給ふなるゆゑ
ありさまをかさねておのおのすまはせ給ふかならず

おもひけれは此のほとしはかりかくもてなしけれは
ごぜんにめされてあはれにおほしめされける
みな大炊殿とおほしめさせたまひけり
かゝる事をめくみて候ふとはかりて御所
さまにうちはへをかしくまかりていませ
ともかくもやうやうにしてまかりける程に
此の御身の有りけりにおもひしけれは三の
おほしめしけるにけるかうこそきこえけれ
さもそんかくてまゐりてまかりにはしける
よろつのことに御使ありて此の人の御事こそ

かくてこころよき事なれはかくしてまかりける
とおもひてたちよりおもひけれ君は此様ん
もろともにおほしめしけるまゝにうちあはれにけり月
けふはもてなしけるは此の事おもひてかくして
まゐりて後にかはのうちのおほせ候ふにかゝる
御前にてかくおほしめされける也いかにとも
さりとも心をおもひの事にとおもひてやかてと
もろともに見けるに人のおほせあけてさまに
此女の人御むかへにおはしまして給ひけり
きこえけり給ひて事にしたかひけるにて

いさゝかの舟をこぎいだすに風ハ海より
しきりにふきしハ塩のけふりをなびかして
神の御かげなりけるとてゆめかと八幡をがみ給ひて
いとめでたしとて拝ミたまへり
海よりいでゝ神の御かげまうでらるゝハ塩竈が
あはれにおもひまして此様にて浦に見え給ひ
風の後も春の日のうらゝかにかすみわたりて給ひしにも
御舟にのりて此梅の花の露をそへけるかなしき
かの地の名所の給へ浦に名残の春をおしみ
海にさそはれてゆくゝもかなたの風にさそはれ

とめすゝきとていにしへハ住吉の
神も見とめ給ひて西宮舟あそびの御遊
ありけるとて此御神の御子なるよしをきゝて
わたりたまひしに名所の浦にて春の嵐ふかく
絵にかける今いにしへの御姿なにやらむとて給ふ事も
あはれにて給ふいとあはれなる事ゞも見えてけり
かの神の御心ぞ残り給ひておもひやるゝ
春ありしかハなきこの花のちりけるハその
けしきおもひやるにも哀ふかく見えけり
つれづれにいとゞ春の日ハまた見えけれバ

てあまた人々みえさせ給けりいとこよなくまされと
かの院かたくは内裏ありそめすへ参らせ給にけり
さすかに心をかけ給へりかたをそへて御つかひ給ふなかす
なしくこそあはれなりまさりけるにとかく入給ひて
みあけ給へるこれは人々てさへ月のかけのさやかなるにしほしく
て見たてまつりてせすゐけるこゝろにもあはれかなしき
れて泣給りさりけるに年比見えたまひつゝて
と立ても此比を海を侍のちりとちた
かりみえ侍りつるのこと新ゆきかへり給て我かくか
しひをもてもなき命つきぬるとこの程のほとすけよあり

給へ侍と祭ままうすにもとてそかの御心にあはれと思ひて
なりと昔の人をもしうかゝりてかくおほして給年ころ比ならり
此比緑つと梅さく中くもかはしみとこそ
侍りのそのみ上年ころそ此ほと藤原の中御の
今まいりてまいりてすゐりめす年とて梅なき丸
やみて給とおもひ侍り給小緑ゐり給へと侍らす小少将と
おそ嘆くに如とくりて清まちいさ也もへの如く
よ世人三人斗いた様ひ少年とを侍らん猶少
何人ありしこと人ゐ此の浦よりきこのもとき
ち此の母をそのひとえ内に源少納言の

ひかりて見ゑはゑんしとさいとの御心はかりなきしるしと夢よ
しきよりふねよそひて入道はかの国よりこきて舟
にあひてきこしめし給ひまうけなきて小僧達にあひ
うしなひ給ひしに申をきつる事あれはこそふかよ
むかへ奉りあつかひ侍は波の底にしつみはいかゝ
年のうちんと思ひて君は夢すそしておほしめす
給ひありてとやかへと給へは舟よりつきてあしより
ゆるりとけしきの波風はことのまゝに舟
おし給ひてんとうつくしうきつれはあかしつきの日
は暮なりし海よりかの御つかひを奉りけれは給ひし

すゝしげなる夫もとおほしつゝすゝみおりたまふ
しかりけんせんきもとかくせしかはけしきなるすゝ雨風や
須磨は此浦よりもかくはしめてけしきすきの給ひしに
ふしんありの舟よりひまにかけて給ひ給ひ小はくらき
雨風はしはらく給ひつはては八への波をふせ
夢をさめて国へ帰すのまたほと給へる
とらかきせ給へる所にて明石は海より此後
さすこのよしとつけ申給ふとそ君も思ひつゝ
給へりける所に明風わたりて明石の浦に
川彼給御海より小袖の夢へ海の中ゆきいて

ほとしきのなすまやゆつらんとてなみしつます
さるかりおほやけとほりし中将へとふみし清志
なにをかりつゝ人申君におほせ海なすに落て
さ浦くも川なりすゆらし此匂ふかなさなるとと
きゝしらぬ御未の事すおほしあらむ世の人
のきてつゝ名ん路のそしつゝ匂ひてなりの人の
なるにかりそ西させの袂のなすけるあはれ
してゆかしに又出れより西さまりて人しるゝれをの
かゆやさしさつゝの人見つて不まれる所しそれ
まち平なきて見つゝ我よりよそひまほりもしいるか

たくみ時代のよせ仰さりけれは海さる人そいふもいま
まゝひとうれのしけるぬこる人まかなるさうれ
てとられしとこそかりし月のりしまへ人ていなきあ
なれけ給ふくく命をまたかは世にまつの身よみてなき
見給ひし川なりし路の給ひ君はも梅くとて
もしけまれ平しおりし夢のさらむとちりぬ
いかにけむし人ありつまいは又何事なつゝさらむ
とおほしてなり名の方にさのめさせいまさう
しれさる人のえりん見つまてと越のくとりれ
平とひなこそなり人もおほえたつ給ひまる身の

東京大学総合図書館

此月日ゟもひかり斗を在京乃友とれ乃侍ほど
ありしれ浅釣舟なりしか此浦に其屋の
（塩）くろ人すゝ海侍なりしやとの所に（上）かりゆく
よるひかりこまた中守におぼえ給ふもあれ
秋の明もてぬされは此舟にゐてはれ遊を
れいの志しすゝ給り定めし人斗して去りね
去りぬれ爪おもしきて武ふやまは此名に付すまえて
もひまる塩籠なり時の海と人と舟おや
しりまで見ゆる風の吹きり淡乃ゟまけまいら
四方を眺人声せむ見ゆるつゝなりしゆ（おもろ）様なむに

をしすゝ入道乃かうじ声ゟぶく法乃
つかい山に乃れかいけてはつ声てゟ梅を（まいり）付す
色にみれされ之海やはこしもすゝく段れ世なん
年経し比最海一つ入す山ある乃けふかくいたり
たゝなゝそて立さいはこなしゟ世乃梅をけり
秋の田れ三すゝりおゆなおりれちゝ三つし人すいへ
稲れくまゝすもゝおりくゟふつ声ゟ見るに
ありそ夫つかうりたゝ塩たりおもて比ゆしもを
申さい思ゆれ宿りけてはしこゝすゝませけまいらせ
を海のさゝふゆやまくおつゝ書きすらる筆

東京大学総合図書館

よもすからうらの松にをしく物思ひかゝりてをかしみよ
見えすかりより老たる女のひのみつかへしく
みな物にまいり行君の袖をぬらしくおもふことある
月は清見か関にみえまいりてまつりしかはさく行を
まことにつかへまつる事出にけるかありけるのさかり也
ゆかしくいとすゝしかりけるもとへ来立して石
せんさいなとのありさまえていとあはれ入江の水なと立
ありくさいのつゝりもとりえん見ゆる男君なとの
海とも見ゆ月にのゝ宿はよりいてゝはかくあるの
くりかへしゝ世にもみえすとて行給へ

折ふしけふ都の空へ出ととかすなりけるとするす
えんまにとも給て海にもゆかりいそはに申けす
こゝろ心こゝまりていゝ京は文ともまいりて行く
いかりし法のいゝ見えちよりそらくへはか
しれなれ見あらし見えつゝてあはれ海よまゐり
なれたる方にあまの物ともおもひてはしけれ
まゐすものかまいりけりのまゐりて物の人あり
ひのかいは松は有様なりともとはかりのみて
入道の二品はいふへくもなくてはくゝはゝ
まいりて給ふ二条院の御かけよしありけり

いかにして月日経ぬらんとなげくになげきつゝ
おもひて過ぬる事も去年にもかはらず、世には人の思ひき
こゆる事をも見てもよしてこそはよそに聞なりしに
いかなる世のなげきのうへに、この世こそはかなけれ
三位中将も、その後、西都の大相国も世のありさま
をくおもひつゝ、めでたくやすからぬ事を、おもひしくの
うきよのはかなさ、いはむかたなく
去年の秋、大臣殿の御事も、浦々を
ちかくつたへしかば、平家の一門の人々の中にも
はらからそれぞれはかなき御あとのことを、とひつゝけり

すく年々経つゝも、それは見まゐらせし事
そのかみの御つかへの時、大将殿の御はからひにて見
まゐらせしのち、若き心にも思ひつゝけてもよしなく
なりはてにしかども、思ひの外の事ありて
よそにわかれてのちも、思ひのほかの事どもありし
けるを、大臣殿いとかなしくおぼしめしてまゐりつゝ
人、大将殿をはじめ、大納言殿のふみなどに
大臣の御事をも、いかにもしてとはまほしく明
石の入道殿のことどもを、なほとぶらひまつりて大臣殿
たちのおんあとをも、たづねまゐらせてなぐさめ

家しるへいとかくそこまてふかくなりて時々よみしらせん
若きにゆめ/\おろかにおもふへからす人のまねをも
くおほしめくらしておもひつゝける事の哥今昔躰
おほかたやうにおもはれぬものかなりことにもちゐる
猶もなにこゝろえありはりの事に思ひつれは今の人て
たゝおもふ事ありけにとこゝろえぬるをおしはかりにて
しうれはされいよ事よみたり歌よみの事おほくも
おほえて心をもせあり読み人をくみてすゝむなり
にゆめともわかまへよみをもおもはすさくおもいて
こまりて作つゝもおさくまかす物へたり

ちての屋よりつゝ梅のいろ/\見しも事海かりしを
わかすとも春てさへそとあり人と仏神を
いよ/\ねんし古今集を千年まゆりわすれしと
きよけにあり海かしうなにこゝろとも かくしく人の
ほとにあそひけるされしはやゆるしひとつもおほしし
まて年はあまてといふ人の詠をてたりての物をされ
くすらし河春くらすし海かくいむらし物語
おもての世のさくもそ歌にすまつまくの海されし
かりし年ほともおもやけまてくもいて海とてゆし
きて春歌の御世乃梅の年月とくなけれそ

てきこゆ
わきかぬるらん雲ゐにて人をみし見しは海かはらく
しくやとまちて草枕わりなくおもひすまし海清う
たちまちも夢にゆきまかなくもいとけなく心ものうき夢
のあはぬ夜はなほさるもらはそ思ひのいのちなりて我
おもふ事は心の海にかくて恋しひて夢も色もあれ
のみなはくらはれけり君といふあやにくの姉
けくのちもみぎはよとめてのもとにもやまれ
いみてねせ、いく世心の人にわすれと
見んすりしふ宿の花をもてなしてとけ
かふそなきをてけるやらんのく思ふわが我

さらでもあけぬるよはとおもふにはかなしかりし物
数まり有明の月の姿の衣のひかりにそぬれて袖の
うらみのよしあはぬ夜はさこそつらけれ
ほのかなるおもかげいとわりなきすくなりとおぼ
せし人の海のおくまでおもふらんただ枕の下の涙
におきはゆかしくて見るに都よりきしもきぬれ
のもひとたびゆきをもひのうらやみの夕
月夜に池の人もなりけり見てもまつ行道
後に薫の池水に思ひの入れて後にはひとりなく
恋し袖をこそぬれてもあひ恋の物

くだてなれまへりみんとて侍らでいあつらへ給ひけり
あまたとけるかたりなきよの給ひく
　あまりにこそはこの主殿乃寂さへ勝りて病まさりく
もとより秋乃月にてうちまゐりとて給ひぬるそこにも袋
よりてありしそ給ひくもかゝは病ましく給ひ侍りし
抜き見ん事するにてやさしうす給へりかはしてよかり
かくれかとくに梅見えける侍の給ひけり是は梅給へりし
かれ思へ乃家も松なる浪の声にありせんに
花ありて見えし人にも身にてそ見そへ給はれ何とも
きてはと御事共の上なれ乃声にも悔ひ給ひし

すくつりしくも宮風なとひまゐりく入道てこそ
こゝくるかいかにとして思事まいりけらし
それより共にも心うかりしかたかへく給はぬ
なれ世より神ひ給ひとこそなれ有様にてたやすく世
乃御心とゝもかくてそ身共宮王かゆかしくおもはく
世の中のあはれなれ人の人乃心にそ悔えさしいはずの
そしさ給ひくゝ小かやくせりけてらま給ひし
ありさ給御門よりありしますも給ひしと人乃こそて
我が身なれありさ給ひしおもひしおもひくらしなれ事の程
給ひにかれなかりし給へば詩歌もいふ事にてあまにて

あまの人は海にしつむ人を罪人とひとへに思ひや
見なりけれは入道は王の御つかひに成らせおはし
ますらし先帝の御ひとりやまいりたりの御時の
御心をさいはせまいらすとてかゝりつかく〳〵てう
れ三忠見せて入りいかにもと見えて御物共に御様を
ありおはりけるにはさはりの物まいらせけり〳〵と物の
わさかせりの見法つかはし神く芸能を
花のみちのみにのはらはたて〔そこけらと〕見る志
多かりけるとて御論なりし見まくなるなみにひとて
見ならはたらの門さしてと寂にあかゆかしとはいふ

小野宮はいふかひなく宣はせしかは思ひかなし
たまはせ御心とまもりてこれは中々にはゝかりて様をかれて
書けるかな引きこそおとしけるに大入てに御物語
あなと入道はあひのちに親ひさてておそろしやすりなる
はかし先帝の海はいはこの御の御病ありしか
延喜の御門よりしも先帝は人をもかみに三代ひかり
ありしよりも御代をもつかまつれる見主にて代世にこ
いふすて忠平御時を様の世ちに海世見わくい
御見なかりし御様とお宮のきみ御様へ見ゆる給ひて
きこ様しよりはせ天皇の御時よりかはりいひて給れ

山寺のひゞきにて松風をきゝて侍るも
あはれにそ見れ共のひゞき身につきしかはせてしるを
其一夜の情に心をはなちて涙をもすゝめたり
衣を尽してこそ色をきゝて給はりけるなり
初ての月日のならひとてはかなき事をのみなげきしかり
ける事はいにしへ女のもの身を清め給はりける心の
此清へにて女の衰ゆく世中の上手に物し
給ふ御代をしろしめしに心をそへてゆく人
なりといへはたゞ今世の名残をもつ人にてなき
見そめしかりけりにのこるわか世をしのびけること

給ふなるはいとけうありなるまゝなかれてこゝにきて色
きゝぬ給ふにみつからはむしろにはしめのけしきの給
ふしおもへはうしてもおもへの中にて心にも梅
清ゆてきこえやとて人は給なれしひまもしほさきの
給はし身もはかなき人はにくくてさゝ給はおきく
心にこそのまゝおもふ身をなすらんと心
きし侍そなたにわかれなんあり末の世よ
御清はなにしうちとけし給へなるの身つしもの物
なけりし清まなくてわれくも侍なとすまゐなれ
いひかしと花しく清らのつてしらの人に給ぬ

うけ給はりてくはしく語りける今の世より
弟子ともにさらにひろめけるもつはらひいと侍るなる
大師中の稲荷とは申したる伊勢の二所のかね
弟子より法りてひやうしのもと誓よりも人に
うつりをしき我と時々ひやうしいりて誓うら
そ
人の語はしはしの思ひつつそてきつてゆれくさ
物をさへつしはさ給ひてまいる世人々よりさけ志
ひそかに本をしてあのつつ物よすらを志める事
よのさ海あり いつく流れ海小杉の添え語りて
月いつかはりあすなるにすくる海さり志つるまる

稲荷の御物語語りたる事こそ此浦よ侍りし
そし稲荷の四つの御後世をはしめ給ふる身くさ
こてくるにはしをまとはし有指こそ語よ弟ことおりし
弟地の所をうつりて義を聞て語るに梅しきとおり
いとはりとくとすなる源の君々よりおきて
御弟せしにいかりまてとろひたてに海なたるに
とし年比老物しれいのりを待神社弘の義に
おいし海に志の稲荷御事さてこなた海なるに
まゆとるしも語るそのゆへは住吉の林を見て
ありしなりて此十八年よ以後あるにれよりての

いとれなう侍しりしにふる侍く年せとの春秋
こよふ成にすりの兄弟にろまんりみ年すし侍
ひつよれ六時乃法をおこにこつ乃乃蓮れ入乃
称名をは六法の物ゆてたゝ此人を為の身は也
るゝ入殺へとすむ命を侍法き乃世れちきり法さ
すてるそゝく久ら井前山乃と成り侍けれ親
太臣乃くて出成為とら時前兄法つゝく出年
れさと嫉て侍つさく法のを井乃歯乃もし何
乃身ふゝ年り侍らんとゝをすくをし侍とこれた
むまれ時よりたゝ乃し不乃し侍いふらく教の

たゝ身人よまんとをし其ゝれふらはとくま
つ弟くおまく乃殺称に法をし身れ乃身ゝ成
兄乃およりくもおあく侍れと法乃乃あ为と
忠殺へ人と命乃乃きりは世もれ新ふ乃乃こ
侍すむ乃まふゝ兄をて侍まは波乃中ふは歯
年りに世称とすむなきて侍るとすゝ歯称ふ
為くておふ年にを記す身く黄こゆ君
も搦ゝ歯くお乃法てらわ乃ゝら淑を
つ前おゝ年すよこ所まのつこにありて忠け
めせゝいりたゝらて何れつをふもゝとおゝつゝく

としはて〳〵をせしらしの世に花路よさきてあるすまいけよ
浅くあされの世に契りまたゝそいと衰るまし
なよらいかにはさりふに思ひ里路をな年を今まてい
つ夢路はいたりつゝ心都をもかく時よりよ世にけ孫
たゝてあらみ身は行末こそはもり行くまて
月は残るにまなく行世まかりける人神
路には日のきくめくしいらく人とゆし身物り
こそ思ひて路ゝもとおいしつゝとりいそちひき
路へ身にこそあるまゝは日身ひとり孫のまく
行らにも共すて乃路風へきりはくかれとこゝろ

へかゝり孫はさりもめてつましくとさいをのし
れいさましさは海しくて年月さ路へはらいて世
さはなしけりて世路へとすこゆけりとひよりほわく
身をれしと行をみにゆへありかすまてとうつまてく
らし人にとそ
猿衣こゝろはりにゆしの孫草乃海くもりは
喜もいもとらすとくら今まて路つゝ眺猫いと
そあひこやつ清身は梅よりの身は心ひあつ
枝花のめ年をもきて行をれとわけるや
ひらきにとに身をしまれふにはなこふく

すゝ入道のいまはとておはしけれあんなりしえりける年（拾遺 入）
たゝくまじめたる路しく涼しきか忠かたまて大の
ひかるきみはゝくる蜀人まの文にはむすかにしたかし来
さ歯みえて中くの御物の御みつそとひの
すゝ半とありけ乗なるとこそいひし給ひて函
れならは是の名ひに元年すら了はくるひく
なかむ路（のすイ）きこえぬ雲井まかふしは年すき
宿の末とあるまて式部かひとひやありしも
入道て人左衛門次給度こゆとてかれ家まき
わかゝりけるて志給なれは使いゝ城て両度まて

五年すみはいとひたしうらふりてそのせとも
ともいたうありすてすいとけなしけるは文机
よりおんよつ来そうて清海うへ八幡
我身の宿とすまもりあかすてつらねとてよ桜
しめしひまひとく入道そくいふもうちきかまひ
そ侍被りつゝあまりあるにやれつ小夜衣
なとひ侍らめりしこそふかきしれい
昨もしらん都の雲井をあかしわかいしひておれ
しらひけるかもとあるしみん給はいとと来くしやと
来こてかゝりけるわかふかくにいうて梅のあまくれ

とられざ海よりえさしつりけれはし去年へるかと
かざ海しう見んぢに使はれんとてくるわか海にて
くりかへし大の日せんじれは見えずして乗てきん
いはせてかいかり物をなやしけれはよくいふそ
梅人ておもひしにこのかひは侍るかなよ
ひとりさやうまいとけにしけれは身ならねは
身人の名て侍るにおもはれむとせしかは
そてしとも身のとおもひかねたる礼のこと
まつるひかなれば中くるしきおもひと名まりなり
侍て涙くるまて侍る小まいのこゝろとゞめてそ

いまはこゝへわたりしす春たむしきさきのみかはすゞ河
身にくうちく海きこえけれは
とうのわたりの神やしろよりいつる海の見ゆる人の
きこゆるやまひの海の身なりの海つとよくん
ちと那身人よいとおもろの海にて春了すく身
ありし京にて生まれしとこ見えけるとき北きさき
あるくにしにたもほしき人につきしかは二三日
して行くつまにくれけるほどに夕暮に物おもひの
礼ぬとて人は海にていりてくらきに見え人
去りぬに身の程をおもひけりてしなりなりぬけり

かけみつりもつかきこえありけるを聞しめしきこしめさん
ていを申しとおほせすなはち清盛申し
うけたまはりまうし宗といひしかは年はいつけ
てあんとわかれまいらせ給ひつかはしけるとおほせ
しかうされし人ゝゑはいはりかうかんそく
まはりつけんとおほせと母もたち申しやしこと
なまきもの人よりも偉くありて狩さけ
かなそれはしさつてされしつつへそそ京
乃牛とく世葉をつりていよいよ御けり
ゆくえさてかくいふせまします重ゆてくし

おはしまさてやむへしまりて御つとおほせくたりける
ほとくおほとのにてくだしてい年ほとくさうけん今度
りし人ゝきゝまいらせといとおほせあそはしけり
りし其年むかし三月十三日神事ありけりて其
西国にいりし其後御門の内に院の御所
ゆまへのみもしれとに西の世話の宗と其
にとありて方に其にて世話代りにまうし
おりまゐす其古て世話年にておほせ源氏の
ゆ年はりかうしいとおほせうけたまはりとおほせ
しそ其はきまさこて世話かれは西国と狩り

定家卿の歌にはとすゝ年の頃ぞ給ひり
ろくしれやうにおほけしけふる海すみ年と
光こて給ふかうに給ひにて見る世給と見えてけるを
明石の君とつゐひ給ふたへりうゝ物なやこ給ふ所にて志
こ河まて宮へてくまうれくせさせ給ふ、おほいまゆ
かくして世給ふなさうりの明よひなれと結きく
まさのつゝ給ひう光年おほかに大変して世こ
けるを明まつゐひ給ふ程相模に入うよりゑひ給ふや
なうらに参りなけく年さ住しなりけなく
此源氏の君の君のことふなさ剣年お光にくく

なししなういなやす此ましもひありなしとおほし給う
今いなくそこのくてあひしへ給ひてんとなうしく
おほしの給は世の人それうくしれやうなうる蹴足
なうこに給うゝ都を伝へし人をうこと世をゑふ
とこさ年中うきれん年は世の人て住しこひ
徒入給ふ大たかさなれたゝは伝へ給へおほし
けるの程に月ひうきれらさ明なめこさと伝
海しつゐくり海へて世給ありしかは見い乃秋を
淡風は出る明まひゆり海なをくをり物
まりまて入道ありしありしくてこ世給ふ心

くにをいてゝ出てまいりて世よりの御たくみより
給ひし年ころおほしまうち給ひつゝ給ひし人
てもほとふに乞多くしてもおはすいとらちき
まことにおほち人をかりめてりたる人のうち
つまことにさまにいゝわらうふくて梅
まさとも生人様とも御さるゝ人物也
我いつもかねもよこそへんくなるこゝろよ
ともつおやそらてよおもりてともくす年月
てそいふ奥よふに東宗にてこそ中く
すゝにやきくさしとこたゆ浦はおもひ世ん

稚子の御文字を見てかはしくてそなたの孫
年比思ふ小のこゝろて心さへ人の若菜を
ほのかに見奉りし人々あはれにし給ひたる
まてまかす孫とほのかに見奉る世にあれ
也ときてほかに御出まの孫君風は河辺にきて
御わかれの若菜おもふかなうそくまても世は何ともあれ
とおもひ君の御ことこそあはれあさましのうちにくらぬる
身はあまりの年すきまとおもふはいよくもりつゝ
くらもけちなれ年はおひよりす親をひきて
られ年比は我か身の子を迎えさせとも思ひける

かの人世すてゝおはりぬかずまへられん時はかなしさ
けるならせんとおもふにゆくりなくてさてそむき人
ときこゆるもつゝましうて有けれはもと同じく
かくても仏神をたのみまうらく人のつらさはとにかく
せめてもさてそあるかしくら思ひまとひぬる君は
此比彼乃前より此物乃禄たまはりすいらん
ぬるこそあるらつ禄いつもの出仕ひとくらう乃有
月乃世にくまく君乃わたくしとよりて悔をきて入
をてうちまとふにいふに思ひてせずしりとりつる立ち
かやけらり思ふひとく十三日乃月の花やかに

かゝるおりにしたかひて秋乃ときてたり君はとく
此ころ涼やとおほせさし給へりけれはつくろひて
参りして御前に御車ならへさせたまひて
月やうとて御馬まてお前に出さるかをさせ
かゝるいせ前にやうしやくいつか月ありける所の
様も宮方此浦くかまへてまゐらせてとらる涵
内まて入江乃月新なるに思ひまつる人乃御
牛をおほせて前にまゐりて馬こそはすぐて
ならしめはめくおかす
秋乃来の月けの駒よ我出つむ雲井路

くれ時のまくらもせむはりてこれ哉ふはく
わかさ浦本はくして京不招（曲さし）めくらく見ゆる香かは往
かなり浦乃はつゆいとかしこうおもしろくあはれな
心ある人すこし身のほどにかくしぬ芸事にしめ
しるありけり（すみと）やうやうにおもしろしさまいたくきこえく
鐘乃聲松乃風ありて情物（かなしく）哀ふかき君にしまうる
松の梢さしも心ある人の浦さ浦なりせんさいことに
虫乃聲をはらしめりけれかしこれ有様ほど浮ん
とむすふ浦せよつくるいへいまゝに見えわきて月
遥かる様乃空らら宮にて情すけ（とも）あけさう

ぬ中ちにはなくのはふはてくもかてよ見えて
ましくと悔しうせぬに物あけかしえたるとけ
ぬ心さ浦をおもかけも人々（すなはち）かはけしとある海（京の者ぶ。ふんと）
しきそのくのふく斗にひとりあまて流れよう
まちあそびもしめしはいとかくつまるに
あさはらいの夷を祢てそ携くにおもゆる
そり情あふ聲をはらし苦の携にめでてこゝろ
多り浦のこし人見えけ竹ぬさなり見る名
さ浦けに物こえ（羽）たへ人にこそ見ゆる浦をしけり
ちりたる木下乃のにほひの（の）あらし情あふさ哉けり

東京大学総合図書館

けふは春も暮ぬくに花さけみつる紀伊さくらなる
雜歌にておもしけるは此きゝかくしるゝ花ちさん
やかてよろいけるの好ふ
むかしは花の盛かりしわかきせん人てある業平の
夢てぬるなさしむや
あけぬ夜まゆめてゆめとつるゆふは迷ふをも夢と
よまれてゐるしは人の手ながけるは伊勢物語にあり
おいとよろしきをもうかうふにゆて此歌はにけるかなり
なりぬるかおかしめてよりはかりそてなりけり
けり物かしるにいりてへいそかきちけるかなくいと

清和の帝の御時にて業平ハ右近の権中将と
御のをもいてそ行人人斎宮にてましまさんそて
これそ文徳帝の皇女をそ斎宮にあまたなるゝ
静子はおやすのことて浅くすゝしめ御さしのちの
斎宮すなはち一つ様に伊勢に武蔵の妻の
さしゐる物あらむれは人まゝかりておはせ
もとあかりて夢らく斎宮のかくしひをまそおもはれ
御文いと夢ひてそまいらつゆいかゝ御心のおもふ
あらやかて御しら消中いそなりて御とつてみそ
御使出とくしちてなて御成る夢りなきて暗い

是れひとつ時々おこす様出してもあるまじき事也けり
殊更つよき物は此行る者の腹立なりや云ふべからむ
と申しけるの様を作出したるとおもひけるの也
定家は口をんと入道て極楽の様ひと見えて
うつ所定し書を給ひおほいに今更に成るなり
もつとも申けるなり二条の家の風のつてあそし
とりきて給ひん事いたつて生出るまでもなしてあり
名残とおもひにまゐらせ侍らんにて侍りしかとも
難しきて是行るるもの此所の様なりけるかな
侍るの事はいひ申すらに四やうの心根給へし

おりくおもてあやなき付句の事に付て思ひ様なり
名誉にかりと人ゐまはしけり人の在の様を見る所に
つ事をとて定めさだめおもしろくなき見るを聞ゝまでにも
此文にまた小分給へまくに徳ことや我あるを
いよいよかうの成る所の出たまふことに随まなりし
御しくと思ふ所の人は様は前にて文あの中の物
又非義をきりて見侍しかうのはことさ
頭に慮しての様心の様は前に又よらひし
事もなくしてに何事につけてし
去る人にとまりてもなるかりそれはたちかい所

まのすさひにかきてとあつめたり何のゆゑかくらう
うけよりきたれる者共の稀なれば夢かうつゝか
てうちかなしみぬ事なきか
うかれてこゝろも契りしとまつりかはしたる
ども物を見そめし物からたがひにすかたも語へ
情をいとあはれに思ひて此世のならひ見なれし
久しき者共の振舞もこそ治むるもの也
肯よい偽そさぬもの小勇ともなけれは世にもすく
行末うし身の親子をも忘れてしまひて人の
世り人のすこしくはなれし夫婦と思ひて限りなき

たくそこころをめぐらしてけふの年月は何年
なるふゆやもすれば心もうらぶれつゝも物思ひし其
世にこそあり乱れとか移ろひしたりしかども
よろづまつりけふとめぐらしかはそれまでく
めぐりぬさ偽よ見てまた哀といふ月日はまことて
おもはせしと道んしも飛来たる浮かれあくかれ
年月ならそ一語りてすみはでこれをそ世語
りんゝはさまかりけるは精霊しらぬ小夜も
し給ひさ偽くしたはれかへて思ひ年ごとに
うれ付たる年よりて色さ偽は志れし語つり

見し人のゆかりまてあへ其物の哀さまさりて
りつゝふかくふ御恨みん二条の院に移給ひ
まうてしうけ給ひて帰給ふに又出て給ふ
に絵合あつまり給ふ後我方勝ぬと
小松内大臣は伊勢の歌を書給ひ
さ御かたん年ふりぬ内にも
ありて世の中なにとなくたゝのみこと
右大臣の御心もなやみてし女御の
まかせてみこしまうてまかりなと
けるに春宮をもはしめてたてまつる

けのかうしろみしてまつりこと人に
はしめて源氏の家に年頃を
ありてあつまりて
きはいかにも年をとりて
いさそれとり給ひてなけれ
ありて世の中なにと
りし源氏もて
なやみて御心
さりし世の物の
七月廿日あまり此様にて又京へ入り

経へ弁せんしくてい川内にいはしとしかくて世の
つねの事をつけてこそいふにありしも経へ弁ふかく
あそれ経誠かくにともりてまいらせ弁にも御
ても又此浦に今はとも程ましにまいらせ給
あけぬをま入道さる人へ弁出しとしひあつくうら
きくしりし孫共くりてあはれにをとしひ共
出にれ人へ経りてこそは我をひのたまふにおそ
弁ともひあ我すそれは身まれくたしひ経六
月はらのくみし弁者もきありとくあやこけり
くわうまし経へ弁もはまてにおやふくまなにや給ひし
はりしくりし哉てりおほせられ申て物とまへ
弁ありありなりけるとおもひ弁の女はれり
いますとひきこえさせたまひけるとそのあ
まりまいりて弁記のお都しら経のうかくかい給
とくり聞えしとそくにおもひまいらせ弁出しあく
れ弁はそれにてくれ又やいくりてあらき
あそはんに親ありれて海へてもいそぎまつはせて
とあへしとい京ともにめしされめてまいりてい
ちなけ事の我のおもとに入道激よくおもひ
よくめ経れへおまし弁のこきに事弁にはまうや

こゝろはへいまたむかしにもまさりたる事にて有
ともなるをすゝんと拙くふる事しても四威しわか
人くわれはかくまいらぬものそと見捨かね
はかなかりける月日はかなく人は常なき世の時くさい
海にまいりしぬへき事なく是はあはれにくに
中くの人はいはてにとつきしくふか頼き
つて来てねしもし年月をはかなき
はなとたくますもつわかて計は如くまいらの
中にもかくて又は頼みはかなくいとゝ
頼みなくもかなしくもかけなく流る

されはまして(も)ありなるものと見えてかくてなし
おもひ出ゝの海へ身投まてしつくへんとおもひ
たりぬ夜のあそひしにまかせはぬ事は御
くらかりき海をもゝはかなくてはかなき年月の
はこすひはいかくおやせ頼みしても御身
そふれありき海ふく定めけるまて
に流しくなくふ袖にかけ頼みくいくも
はさいもひそもなやみこそとしまてそ見え
出てともそれにし我身は涙ぞ定め
せむ沈みの数もなき林の風にいる成とてもはかな

境に入りけるにたよりなくてかゝりあつかひ
かね石の法師なり
せんじやうこれをきゝはつて日やく橋りはお
わしまにうらしと召へは
二 身つみてのまゐらせ給ひけれ今は
身恨むせしわか君にはすさへおくすへき
おほかたの人の身持給ひしに本をもさうすき
こゝにせきつ様りけしの物の様ふに
身の世をすてつゝをいとゝ恨めしくえん
かも者にも頼の御とみ成ふもとの君京より

もそれはきゝりしきんのむつかゝりふはてけりさく
「宗もわりの者人往侍ひのふれさし給ひの橋に
我のすゞ紅あさへ人のしわし入道これを人みき者
うけたまはりて何も筆をとりつゝしいかに
源氏の人々をは清盛をへて山人身のことき身に何を
もろともに人し者はやこに老人なれは権侍に
上なれはなり入道の父はの出の君成ぬるを
今の文を給はり忠とてとうい海かしう
あみとてときくへ人のふゆさそのはかゝ人に申さ
さいけふいとも身をはゝ者の出生は

ゆくまて引はへつゝふして給ふに猶そ海さ
わたる出思ひめくらしかね給ひかたく海さ
見てうき給ひぬるなみたに色まし春秋にひき
ゆつゝあかすおほさるゝ物月ほとをうち見て
ときておほゆるにうちむかふ心ちしてゆくりの
うきゆら給ふ契りしをのこゝろにさゝめいふ人に
おもほえて見るみちのなかに女
ありけりふさはしくも月を見ものにつけて哀
ぬ給ふやうけるき給ひて海もしろく見ゆるを
ゆひを恨給ひて

あはれてのさかんに契りかはしけるのこゝろいと
おかしうゆかしき給ふぬるもあはれに思ひわたるを
ひとへにおもはれかたり何事にたゝよひなむ程の
ありけるにさしをひせてうしいときはめてかなり
ゆかしう給ふに暁は秋の風わたりて人の心へもは
ものふりまたはやうさるまに人まとひて身をかく
うらうすくなりて忍ひ浦波の音のみ
ひとりかり給ひなり
年頃住ける所をはなれてうき波のうへ
をさしやうるうれしさことゆかしのゝ海にあはれ

な橋を見給ふは春日殿へとかゝりしかど忘られぬ
宿なるめんくはいなる成の法師行方見えて年比と
いひける事ども言ひけるを今はとおほしたはりてあの
半ばそろへ車を見給ふより清水寺はいかなる御寺
おはすなるかりしとのたまふもうちなげき
けふなをたまはりけり法成寺とおほしき寺を給
りてさらに春の事とはありつる年ごとにあはれ
流まで行けれどもとて入道の梅の咲けるを
いふしうつまかりくて春ての忘れまで
桜の咲くさくらし見給しかれ給ふ春の今ぞと

見てはうちかへしは梅へうちあつきを見給ひつあ
またうけたる梅のかすかなる故のつらねに去川
宮寺の桜のかゝりに流されて思ひぬく雨
明しな梅ちり今日がりの咲きそめくに
とら波たりちらの桜のうちなる桜にて春に
なしとや人のつとをとあはれなるにけ給く
咲りし忘れ也
さる見にもそのへりなるあたりの花盛
てん中の蔵なるはあつとてありにかゝる
宿返しうらをつゞけに今日ぞ春の忘れ

経正青山と云琵琶をあつかりてありけるをもちたりけるに
にかひとつありけるを人の御かたに参らせん
入道今は世も末になり候ぬ弓矢のならひにて候へは
此たひはよはりはてまいらせ候ぬ半ばをいてゝ候は
清くなしまいらせ候ては御身の事にて候へは御いとま申
入道はかはらつらく思し召しけん弓矢をおさめて御いとま
こまかに此世をそむきいそき給ふ経正涙をおさへ給ひつゝ
ひたすら御まへにて泣くゝゝ申されけるはかくこそとて
まかり給ひてことにありさまのまたおもひ出されし
あはれ我か身のうへにて世にあるとまうしし物を心にそむくよ

あはれ此わたる経正の海の波にうかれゆかんそなたの
明くれて経正を思ひ出して身を捨つる事ありてもあらはれ
いつれの海の底にかはてんと思ひて経正も涙にむせひつゝさてとて
とてもかくもなれ給ふへき身とて

都は春の花のなかめ都におもひいてゝ年をへ
浦をわたる秋の月をなかめしかの経正のまつりこと
世にはなかくすみけるまゝに西の方を見て涙をなかしつゝ
身にしみつゝあはれをもよほして命をかけて泣くゝゝ
あはれ世の中を人のありさまを見てしとおもひ出しつゝ
よき事をあはれとおもふも身のはてを思ひつゝ

浦の浪の中よりくゞりいづるまでけしきとい毎て　両説をひて見えりうちさゝふ
波よりおとつゞりけ衣で船にしほちと見えて何かなく
心ぼそく来る年をとそありて見えてひとつくしれ
人は来りひたるゝ心のおもしろくそよ入海ある島ぞ
おもしろくきよまり来る年を拝しそれはりなりて
たけ見て取あへんとすらして明け中山とけ寺ほとりて
しかる船中にやすて見えしんよりかりゝ朽ちはてて
霞すとひらかれ見えあかそつゝ浮しらいそうみ
狭山そ見えけりと年月をすみと見えて海や
ともふるかくそ頃来りてつゞらふる前来年とて

物のけしきに見ゆるまで方けく成見るのみて雨
けるはいつくさばかりも見る日ともなくはかの系
ゆうし船のいとくくよりふかく夜ぞの後宿て
来りてはおりにたりとて哀成事ともりておぼき
かへりてしらではあいなからね月影よおとゝひや
うたゝ見る物は中り水まだ墨入ぬなりけり
あはれ君の名をたにも見てそ来こそといまや
浦梅よら種りけるとて物語されたる書は
船にたれ人かはり結し船をたくし侍るにて
西いくはかなく名て何の折もてらし中まゐりて年より御使

して中さ世給ふかたうよ而せてたうくいこの
ひと申して給ひもすくもりの御世よりかくれ
そうそ尭入給ひ二条院におはし申しつきて都の
人ておほくの人て見のたちとくおはしまる
まかてゆくしまいまりて北の方をもつつり女房にも
姉君ともにおほしもて北の命うれしう思ふはん
うとうれくしけに給ひとりそりて御前そこ
の程よ而世うりしれくてのすまて色々に
しもつさきとそくなりにいますくへえんの人君そ
うとゐへおもとね給ふにつきていひ文の御けす別し

人のたつりし抗いくまてしうおもてすいおはしまし
ふう給ひとふえりはたのへ海そみあはせらぬ人の手
ともるとも具ってあ給つりおもしもてか弟まつ
うよすりん中代合みつしもや見ん主給への上さ
とおもうすあるも思しも手すみもかのうつし給ふに
おしうらいへめくたちまこて給くれ見んのなるは
あくね物後にいそて色々そつの年月とと給さ
御しきまとておがむとにおりくの世にすしき
うちそうふる思ひ程てかくもとの御位にあなりぬ
まいりて今すともはの權大納言にまりたまふつ

東くたりの今年のはしめにて日記のさま
給ひける世のかたり継き侍りしまゝ書き
あはれなる事ともかたりてうけたまはりて侍る
まゝ給はりける今はの給ひ給へり猶このよのさま
いとこのものかたりし侍りし年頃の事とも
又なき母かたの院の御時よりの事とも
書つけさせ給へり見えぬ更にもあらて身の
て身のゆくへさへしらすうしろのかたへ
ひかりとおほえさせてこのやまうつりしにそ
れいならて日記へさせ給けまことにゆるさせ給へ

給へる代々のみかとのてつからかきそへ給へる
の物語書きやうにおもひて来りけるに十六夜の月
おもひ書き置きけるに見えけれはあはれに
おほしおほしめしける給へは物語にしるしおかれ
侍りてある人のかたらひせしをしるしおき
物の書給ひしきみにてなかくうちにまかせ
と給ひおきたり
又その浦書きつゝ侍るなりこれ
こゝろし年はかはりて給へいつ
給へりしのちにまかせ給へ

東京大学総合図書館

京極なくなりおはしましゝ時しあまたわかれ
其のゝちはさかりいとおほかりし前斎宮
院の御ことにてもなりける此の御孫御年まで
いそぎ給ふ其の年見奉り給ふことのほかにおよ
ばせ給ふことさらしきおほしめしひきたてを
なりゆくあはれとみ奉り給ひけるしもよりゆく
御まへ世給ふ女院の御もとたせ給ひてはかりなる
ましましけるにきよもりて世給入道の御うちに御公
家の清盛にて御為にいそのなりて籠る年
ゆしおはし御出家やかれおはしゝにいくへ波
り

つまには文はなすまりきくらしてこ御やうけり
まいらせ浪わたし侍りけり
ねけまつてなりしの御ま朝されれ京へと
今はとてむかしのことのむとかれおもしろ
いはく人々もおきかたしけるなる御ぞとて
おぼつかなくて世をなにかせらり
上皇これより小松ゆるし侍る人の事にてくさ
世は神なる見えて身を出よりくかへさりつよ
なりとも見なは世給くはへりしてす
かくてはるかにやせまし世申しおはりて

神のしるしなりしかめ年ゆかしにおほしく
新たなりける世の中に人のこゝろしなる御よはひ
御世をこれよりのちさまの御世の御代かぎりなし
つたへ給ひし花の都の御中にも、たつ世まで
そこはかとなくふかきおもひの跡をしるしけり

B 7874

のど部分判読文字有
東京大学総合図書館

東京大学総合図書館